

## 安土桃山時代

天正 3 (1575) 年金森長近が越前攻撃のため鷲見郷を通過したので、保光は鷲見郷内の上野へ逃げた。また、この頃になると鷲見氏は先祖伝来の土地を守ることが困難になったので、勢力を付けてきた東氏を頼って領土の保安を図った。

第 14 代城主は、行保の二男の武保の長男である永保が跡を継ぐ。永保は弟の弥平治と共に八幡の遠藤盛数に従い、永禄 2 (1559) 年の東殿山の戦いに参戦して戦功をあげた。

鷲見城にいた永保の子で、第 15 代城主鷲見忠左衛門保義は、遠藤慶隆の家老となって 400 石取りの上級武士となり、八幡の柳町に住んでいた。そのため、鷲見城は家臣の松下五左衛門が留守居役を務めた。しかし慶長 5 (1600) 年愛宕山で稲葉貞通軍に遠藤慶隆軍が急襲され、鷲見忠左衛門保義は戦死する。一方、稲葉軍には忠左衛門の従兄弟の鷲見喜平太保能がいたが、忠左衛門の子供の忠三郎は同じ年に八幡の小坂保岐の戦いで戦死した。こうして鷲見家の本家は、忠左衛門の死後、11 代城主行保の孫の餌取弾正に乗っ取られ、主流は絶えてしまう。一方、11 代城主行保の子、鷲見保重は文明の頃に土岐成頼の武将として軍功を上げ、山県郡北野の地に居住した。その後その子孫は北野付近に在住する者や、城主の転封によって他国に移りそこで子孫を繁栄させている。



郡上八幡愛宕公園内にある五人塚

高鷲には 11 代鷲見城城主鷲見行保の子で朝保について名刀千束丸について説話が「鷲見大鑑」に関連することが記載されている。

「高鷲村向鷲見に城山といって鷲見氏代々の城跡がある。ある年朝保は、大番の役が当たったので京都に上がることになった。大番の役というのはその頃の武士が六ヶ月間京都の御所に守衛をする大切な役目である。

上京の途中桑名から供人をば家老に連れさせ、自分は家来一人を連れて伊勢大神宮に参拝し、道を長谷越の間道にとって、大和の国の三輪の久保という所へ出た。この山道を通っていると路傍の大木の下に一人の青年が昼寝をしていた。すると後ろの林の中から一匹のうわばみが出てきてこれを呑み込もうとしたが、不思議にも青年の腰に差していた刀がひとりでに抜け出てこれを防いだ。うわばみは驚いて一旦退いたがまた再び襲った。しかし、刀が自分から抜け出て防ぐことは元の通りである。

物陰から見えていた朝保は青年のそばに行き、これを揺り起こし、この刀を所望(しょう)したが、青年の言うには「この刀は町の鍛冶屋に朝夕たゆまず三年の間薪千束を贈って漸く作って貰ったものだから、幾らでも売ることは出来ない」という。朝保は、自分の指料(さしりょう)岩切丸という名刀と取り替えて貰った。この刀のつかやさやは藤蔓(ふじづる)の千段巻きのお粗末なものであったから在京中同僚の武士達はこれをあざわらわぬものは無かったが、刀身は青年の真心が籠もったものか、非常に立派なものであった。この刀は薪千束に代えたものであるから千束丸といった。」

さらに、鷲見大鑑の『鷲見家相伝』の中に「朝鮮陣のこと」が書かれているので紹介する。

「鷲見長門守殿は朝鮮陣の時、260 騎で御出陣され、岩瀬城で大変な手柄を立てられた。その時、とらあやと言う打ち物を奪い取って、日本へ帰ってこられた。これを都の帝王へ

献上すると、大量の褒美をいただいた。翌年鷲見氏は大番役にあたり、家来 130 人を連れて出仕した。」とあり、鷲見長門守は鷲見朝保のことであるから、朝鮮陣の後、千束丸という名刀に出会ったのであろう。

「朝鮮の陣」とは、豊臣秀吉の朝鮮出兵のことである。秀吉は、国内統一を成し遂げると、新たに海外進出をくわだてた。そして、朝鮮に対して日本への朝貢と対明侵攻の際先導を求めた。朝鮮がこれを拒絶すると文禄元年(1592)、秀吉は肥前の名護屋に陣をしき、大軍を動員して朝鮮を侵略した(文禄の役)。秀吉軍は平壤などにまで進出したが、武将達の間不和と、李瞬臣にひきいられた朝鮮水軍の攻撃や朝鮮の義兵による抵抗、明の援軍などのために、次第に追いつめられた。講和の交渉に臨むため、秀吉はいったん兵をひかせたが、交渉が不成立の終わると、慶長 2 年(1597)、再び出兵し、侵略した(慶長の役)。長門守は、文禄の役に出陣して手柄を揚げたのであろう。

## 江戸時代

高鷲における江戸時代の主な事柄は、やはり宝暦の郡上一揆の事件である。ただし、宝暦の郡上一揆については、『会報高鷲の文化財』第 125 号及び第 126 号で述べたとおりですので、ここでは省略する。

その宝暦騒動後、金森家の国替え後、丹後の国から青山幸利が藩主として転封となり、宝暦 8 年(1758)にその家来として横田家は来郡し、大組小頭を勤めた。口番所とは他領との出入り口にあたる街道筋に設けられた関所で、出入りの荷物を改め役銭を取り、また出入りの通行人の改めをしたところである。郡上市内の口番所は遠藤氏時代にできたものであるが、青山藩時代には次の 17 箇所の口番所があった。木尾口、勝原口、那比口、大矢口、戸谷口、白谷口、羽佐古口、安久田口、坂山口、寺畑口、小川口、坂本口、大瀬古口、向小駄良口、前谷口と高鷲内の中切口と向鷲見口の計 17 箇所である。

向鷲見、中切の口番所は山から川へかけて垣根をしつらえ、道路に面して見張所が設けられ番所役人の住宅があった。荷物の出入りには税を課し、領民外の通行に対しては点検の上日限を定めて通行手形を与え、始めて領内に入らせた。

天明元年(1781)から寛政 2 年(1790)まで中切口番所勤番を努めた横田代助については、その祖先横田傳左衛門が青山氏と共に宝暦騒動によって郡上藩に移り住み、代助はその 4 代目である。代助は宝暦 9 年から足軽で、同 11 年には持筒組に配属となり、安永 10 年から天明 5 年に病死するまで口番所の番人であったと記してある。代助の子、孫三郎は天明 5 年に 5 石 2 人扶持で親の跡を継いで口番所の番人になり、寛政 4 年まで勤めている。この記述も高鷲村史と年代が 5 年ほど違っているが、代助・孫三郎ともに中切口番所の役人であったことは間違いない。

中切村の人々は代助の人柄と博識および遺徳を偲んで、当時の中切村の豪農鷲見忠左衛門が下記の墓碑を建立した。なお、この墓碑は現在高鷲町中切の往明寺にある。

苗霊心常世身作一堆山 奉仕神籬道轟如天地間  
丹州宮津産高月清然信士 横田代助晴英墓  
なお、側面には「寛政二庚戌年十月十六日」と記してあることから、代助が病死したのは八幡町史に記してあるとおおり天明 5 年が正しいと考えられる。



中切口番所の位置図

江戸時代には、新田開発をしたもう一人の鷲見忠左衛門について記す。この忠左衛門は、鷲見家とは全く関係がない。

文化年間(1800 年頃)になると鷲見忠左衛門保隆やすたか父子(鷲見家一統とは違う人物)が穴洞村一帯を開墾しました。豪農である忠左衛門はその富力を持って多くの人夫と費用を費やして文化 9(1812)年 8 月に開田難工事を完了し、富田新田と称した。特に灌漑用水路の掘削は難工事であって水源を大日ヶ嶽の中腹より引き、千数百米のいくつかの急峻の箇所を迂回して作られた。今でも「金造ヶ端」「けずり岩」などの地名が残っている。万延元(1860)年頃より正ヶ洞用水や岩高用水なども作られて田代新田(鷲見)、正会成田(中切)、梁島新田(切立)、折立新田(西洞)など多くの新田開発がされた。

なお、現在において正会成田碑は郡上市の史跡に指定されている。